

一本の釣りざお

小川未明

青空文庫

あるさびしい海岸かいがんに、二人ふたりの漁師りょうしが住すんでいました。二人ふたりとも貧まずしい生活せいかつをしていましたから、町まちや都みやこに住すんでいる人ひと々とのように、美うつくしい着物きものをきたり、うまいものをたくさん食たべたり、また、ぜいたくな暮くらしなどをする事は、思おもいもよらないことでありました。

二人ふたりは、どうかして、もつといい暮くらしをしたいものだと思おもいましたけれど、どうすることもできなかつたのです。青あおい海うみの面おもてを見みつめながら、二人ふたりは、そのような幸こう福ふくになれる日ひのことは

かり考かんがえていました。

「いくら考かんがえたつてしかたがないことだ。俺おれたちは働はたらくより途みちがないのだ。」と、乙おつは甲こうを悟さとし、自分じぶんを勇ゆう気きづけるようにいいました。

「それはそうだが、このうえ俺おれたちは働はたらくこともできないじやないか。」と、甲こうは、ため息いきをしながら答こたえた。

ほんとうに、二人ふたりは、雨あめの降ふる日ひも、また風かぜが吹ふいて、少しょう々うなみ波たかが高いような日ひでも、船ふねに乗のつて沖おきに出でて、網あみを打うつたり、魚さかなを釣つつたりしたのであります。

なにごとふたりも二人ふたりは、たがいに助たすけ合あいました。そして、たいていはいっしよに働はたらいていたのであります。けれど、人にん間げんの運うんと

いうものは、まことに不思議なものでありました。こうして、同じ船に乗って、同じく働いても、一人に幸い、一人にはなんでもないこともあるものです。

二

ある春の日のことでありました。陸には、桜の花の咲く時分でありました。二人は、北の青い海の上に出て釣りをしていました。たいがかかる時分でありました。いくら二人は、こうしていつしようにけんめいになつてたいを釣つても、それを自分たちが食べることはできなかつた。みんな町の魚屋に売つてしまつて、その

金で家族のものを養わなければならなかったのです。

「ほんとうに、俺たちは、こうして毎日たいをとつても自分の口の口に入らないのは、考えると、つまらないことだ。今日ひとつ自分が料理をして子供らにたべさせてやろう。」と、甲がいました。

「ほんとうに、そうだ。私も、家に帰ったら、ひとつ料理をして子供や妻に食べさせてやろう。」と、乙がいました。

その日二人は、海から働いてたがいに家に帰りました。そして、甲も乙も、自分たちのとつた大だいを一尾ずつ料理をしました。すると甲のほうのたいの腹から小指の先ほどの真珠が飛び出したのであります。

「これはたいへんなものが出た。」と行って、甲は喜んでおどりがかりました。そして、家じゅうのものは大騒ぎをしました。

甲は、さつそく乙のところへやってまいりました。それは、乙のところのたいからも真珠は出なかつたかと聞きにきたのであります。すると、乙は、甲のために喜んでいいました。

「甲さん、そんないいことはめつたにあるもんでない。おそらく、あとのたいをみんな腹を割つてみたつて、もうこのうえ真珠が入っているものでない。これは神さまがあなたにお与えなされたのです。」といいました。

甲は、こう聞くといつそう喜んで家に帰りました。

三

甲は、これがために思いもよらない大金が手に入ることになりまして、その翌日から甲は、しばらく海の上に出ることを休みました。こんなときに、骨休みをしなければならぬといつたのです。

乙は、独りで海の上に出てゆきました。雨が降つても、風が吹いても出てゆきました。それを見ると、甲は、あまりいい気持ちがいしなかつたのです。なんだか自分独り樂をしているのが悪いように思われたのです。

「乙さん、あまりたくさんな金は融通もできないが、すこしく

らいならいたしましょう。」と、ある日、甲は乙にいいました。

乙は、考えていましたが、

「それでは、まことにすまないが、私に、さおを買うだけの金を貸してください。いまのさおでは、思うように釣りができないから、もつといいさおが欲しいものです。」と答えた。

甲は、内心、いくらいいさおを買っても釣れるときは釣れるが、釣れないときには、やはり釣れない。すべて人間のことは運だ、俺のようなものだと思いつながら、

「それはお安いことだ。」といつて、わずかばかり金を貸してくれました。乙は、その金で手ごろのさおを求めました。

四

金かねが入はいると、甲こうは、いままでのようにじつとしていゝことがで
きませんでした。上じょうとう等あみの網かを買かいました。また、いい着物きものを
みんなが買かいました。また、町まちへ出でて見物けんぶつに歩あるきました。

「金かねがなくなつたら、また働はたらくばかりだ。」と、甲こうはいいました。
そのうちに、真珠しんじゆを売うつた金かねは、すっかりなくなつてしまひ
ました。甲こうは、ふたたび乙おつといつしよに海うみの上うへへ出でて働はたらくこと
になりました。けれど、昔むかしのように、おちついて釣つりをしたり、網あみ
を打うつたりしてゐることができなかつた。魚さかながとれると、かたつ
ぱしから腹はらを割わつて見みていました。そして、真珠しんじゆをのんでいな

いと、みんなその魚の屍さかなばねを海うみの中なかにほうりこんでしまいました。

「甲こうさん、なんでそんな乱暴らんぼうなことをするんですか。」と、乙おつはびつくりしていいいます。

「今度こんど、真珠しんじゆを見つければ、その金かねで町まちへ出て商売しょうばいをするのです。もう、私わたしは、魚さかなとりなんか問題もんだいにしていけない。」といつて、ところかまわず網あみを打ちました。けれど、もう二度どと真珠しんじゆをのんでいる魚さかなはなかつたのです。

甲こうは、とうとう自分じぶんのおろかなことがわかる日ひがきました。そして、おちついて魚さかなをとつて、それをばまた町まちに売うつて生活せいかつをしたときには、まったく昔むかしにもまさる貧乏びんぼうになつて、上等じょうとうの網あみに破れめができたときです。

おつ
乙は、さおを大事だいじにして釣りつをしました。そして、甲こうの恩義おんぎを
ながかん
長く感じて、甲こうの困こまつたときは助たすけてやりましたので、甲こうはいま
さらながら、一本ほんの釣りざおを貴たつく思おもつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「読売新聞」

1921（大正10）年4月30日、5月2日～4日

※表題は底本では、「一一本《ぼん》の釣《つ》りざお」となっています。

※初出時の表題は「一本の釣竿」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：雪森

2013年4月10日作成

2013年8月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一本の釣りざお

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>